

松尾山鞍馬寺と号するは、白鳳十一年天武帝大友王子に襲れ、此所まで逃のび給ひて、鞍おける馬をつなぎしより

鞍馬と名づけ初しなり。抑此寺は、延暦十六年に大中太夫藤伊勢人の草創なり。此人仏に帰する事篤、たゞ勝地を求め

て精舎をいとなみ、觀世音の像を安置せんと常に願り。ある夜の夢に、洛北の山嶺に至る、忽然として白髮の老翁顕れ

語て曰、此山は天下にすぐれ、形は三鉢に似てつねに彩雲たなびく、汝此所に精舎を建立せば利益無量ならんとぞ。太

夫翁の名を問しに、王城の鎮護貴船神なり。夢覚て何れの所ともしらでありければ、久しく飼る白馬に鞍を粧ひ、むか

し摩騰法蘭は舍利像經を白馬に乗せ震旦に來れり、されば白馬は靈畜なり、汝定て夢の地をしるらんとて、童子をつけ

て馬を放しに、其馬都の北なる山に駆り、茅の中にぞ止りぬ。童歸りて此よしを告る。太夫往て其山を見るに、夢にた

がはず、しかも叢林に毘沙門天の像を得たり。則一字をいとなみて此像を安置せり。されども觀音の像を置ずして願ひ

いまだとげざるよと思へる、又其夜の夢に天童來りて曰、汝多門天の像を得て觀世音を願ふ、応知觀音と多門天の名は

異なれども同一體なり。覺て後願ひ今は充りと歡喜せり。又一字をいとなみて千手觀音を安置す、今の西の觀音院これ

なり。正月初の寅の日諸人群參する事は、毘沙門天十種の福をあたへ給ふ誓願ありて、賈人うりかふ物の利潤に虎の千

里を趨る勢を縁にとりて此日參るなり。六月廿日の竹伐といふは、当所の俗人、本堂と西の觀音堂に集りて、一丈ばか

りなる青竹を双方に立おき、本堂は近江方、觀音堂は丹波方となづけ、一山の院衆法筵を催し、互に相凶の声を合せ、

かの竹を三段にきりて堂を下り、一の曲切石のもとへ足に任せて走りゆく、早を勝とするなり。此來由は往昔南都招提

寺じの鑑かん真しん僧そう正せい、此山に分入れしに、雌雄の大蛇あつてちまたに蟠る、僧正しばらく持念ありければ、一ツの蛇忽に滅けり。今一ツに向ひてけふよりして人を悩す事なく、又当山の用水ながく絶す事なかれとて放やられけり。それより本堂の北にあるあ閼か伽か水すい滔たう々たうとして涌出、今にたゆる事なし。しかれば竹をかかの蛇へびになぞらへ、是をきりて魔を払ふなり。扱又夜に入て里の俗を壹人本堂の中に座せしめ、院衆法力を以て祈殺し、又祈活す事あり。かかの俗人よにはかねてび毘し沙しゃ門もん天てん此事を告給へり、役を止べき時にも告給ふ。奇妙不思議の事ども多かりき、秘してかたらず。

朝あ明み神かみはくらまの氏神にして、大門のうちにあり。祭れるところおほあみむちのみこといちざ大だい己じ貴き命めい一座なり。朱しゅ雀じやく院ゐんの御時天慶年中に勸請ある、由ゆ木ぎと号する事、天子の御悩あるひは世のさわがしきとき、朝あを此社にかけらるゝなり。〔例祭九月九日〕庭石、焼炭、木芽漬は此所の名産なり。■おろし、うず桜世に名高し。

歌 林 霞たつくらまの山のうず桜手折枝折に折ぞわづらふ 頭 季

夫 木 是やこの音にき、つ、うず桜くらまの山にさけるなるべし 定 頼

袖中抄曰 雲珠桜は唐鞍の雲珠に似たれば、鞍馬くらまの縁にいふなりとぞ。